

# 第一言語習得過程における軸・開クラス構造について

広島大学大学院 山岡 俊比古

## 1 はじめに

一般に外国語教育は、各時代においてその時々に興隆していた言語学、心理学に深く影響されてきている。たとえば、いわゆる Grammar-Translation 方式はきびしく批判され、構造言語学、行動主義心理学に支えられた Audio-Lingual Approach におきかえられ、この説も批判され、変形生成文法と認知心理学に支えられた Cognitive Theory が現われてきている ( 3. pp.76~94 )。

このように外国語教育において主流たらしとする説は転々としているが、注意しなければならないことは、それを説明する学説がいかに変更されようとも、外国語習得過程における本質的なものは一定不変のものだという認識を持つことである。(一定不変ということは、それが単一であることを意味しない。)各時代によって、外国語習得過程の本質が変化するとは思われないということである。従って、われわれは個々の教授法の是非を論ずる前に、あるいは独自の教授法を構築しようとする前に、この外国語習得における普遍的な過程を把握しておかなければならない。

この普遍的過程は、言語の本質、学習における本質的過程などと深いかかわりを持っているものと予想されるが、それにせまるひとつの手段として母国語の習得過程を理解することは意義のあることと思われる。

心理言語学の中の一分野である発達心理言語学は、幼児の第一言語習得過程を説明しようとする研究分野であるが、そこでの研究が最近多くなされている。それらの研究の大勢は、言語習得における幼児の普遍的な能力の存在を認めるという点で一致をみせているように思われる。最も論点となっているのは、この普遍的な能力の実体が何であるかということであり、これに対する新しい仮説がまさに日進月歩の感で提示されつつある。( 9. pp.vi~xi )

これらの研究は、人間と言語のかかわりを最も根元的な所で捕えようとするものであり、言語に何らかの関連をもつすべての研究に対して、最も基本的な情報を提供してくれるものである。外国語としての英語学習が、言語を習得するという点で第一言語習得過程と同じであるとするならば、英語教育学の中で研究を進める者にとって、発達心理言語学の研究は、大きな参考となるというよりは、むしろ決して無視できないものであるということが出来る。以上のような認識に立って、今回の論では、幼児の第一言語習得過程において典型的に現われる二語文 ( two-word sentence ) に焦点をあわせ、発達心理言語学がこの現象をどう説明しているか、また、そこから人間と言語のかかわり方に関していかなる仮説が提示されているかを見てゆく。

## 2 二語文

幼児の第一言語習得過程を説明するためにこれまで通俗的に用いられていた考え方は、幼児による周囲の成人、特に母親の発話の模倣と、試行錯誤による練習と、親から与えられる強化であった。このような一般的な考え方に對し、これまでに幼児の第一言語習得過程を科学的に観察した結果が多く報告されている。もちろんこのような観察記録は、いわゆる幼児の performance を記述するだけにとどまっているのではなく、その performance を生む competence を説明しようとする点に重点をおくものであり、その意味で単なる観察記録と異っているのである。また発達心理言語学者を特色づけているもう一つの研究態度がある。それは、幼児の言語を分析する際に決して大人

の文法を基準に用いないということである。これは幼児が言語体系を大人の言語体系の単なる模倣として形成するのではなく、幼児自身が与えられる情報をもとにして自分で仮説を立てながら体系を形成してゆくのであるという前提と関連している。これは、与えられた情報をもとにしてその言語の体系を構築する言語学者の基本的態度と同一のものであり、この意味において幼児を言語学者に例えることがなされる。(4. p. 2)

さて、Braine は三人の子供の発した二語文を観察記述し、その中で用いられた語の分布分析を行って、二つの語のクラスを見出した。そのひとつが軸クラス (Pivot class) と呼ばれるもので、他が開クラス (Open class) と呼ばれるものである。この二つの語のクラスは Braine が最初に指摘したものだが、他の学者によってもそれが確認された。Pクラスの語のもつ分布上の特徴は、

- ① 必ずOクラスの語と伴に生じる
- ② 生じる頻度数が高い
- ③ このクラスに属す語は非常に少い

であり、Oクラスの特徴は、

- ① 単独でも生じ、Oクラスの語と伴にも生じることができる
- ② 生じる頻度数が低い
- ③ このクラスに属す語は非常に多い

となる。このことを句構造標式で示すと次のようになる。

$$\text{PS1.1 } S \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} (P_1) + O \\ O + (P_2) \\ O + O \end{array} \right\}$$

PS1.2  $P_1 \rightarrow$  allgone, byebye, and so on

PS1.3  $P_2 \rightarrow$  off, on, fall, and so on

PS1.4  $O \rightarrow$  boy, sock, mommy, and so on

(4. pp. 41, 43)

この規則は、幼児が二語文期において自分の頭の中に形成しているものと仮定され、幼児の competence は、このような規則を含んでいることになる。

### 3 文法的範疇の階層

さて、二語文という performance を生む competence を句構造規則で示したわけだが、ここで問題になるのは幼児がいかにして、この competence を獲得したかということである。これが親の発話の単なる模倣によるのではないことは、二語文の中に、allgoneshoe, allgone sticky (1. p. 10) などのような、親が決して口にしない文が含まれていることから分る。そもそも上に示した二語文を生む規則は大人の文法の中には存在していないから、幼児がこの規則を大人から学び取ることはできないのは当然ともいえる。

Braine は、このPクラスとOクラスの分化を、幼児による語の位置学習の結果であると説明している。(1. p. 13) つまり、幼児が耳にした語のうち、たまたまその起る位置が学習された語がPクラスに属し、まだその位置が学習されていない語がOクラスに属しているのだと結論しているのである。しかしこのBraineの説は、すでに多くの学者によってその不備な点が指摘されており、その中心となる点は、Pクラスに属す語に共通して、しかもOクラスに属す語にはない、ある特性

が存在していることを説明できないという点である。(7. p.29)このことは二語文が電報文に移行する過程においてみられる、Pクラスの分化をBraineの説では説明できないという事実と関連している。Pクラスの分化とは二語文期を終え、三語文、四語文へ移行する過程においてPクラスが示す類的分化のことであり、この分化過程は二人の学者によって克明に観察記録された。

マクニールは、二語文におけるPクラス、Oクラスの分化の説明に、このPクラスの類的分化から得られる考え方を導入している。つまり、チョムスキーが、文の文法性の度合を説明するために仮定した、文法的範疇の階層という概念を用いて、このPクラス、Oクラスの分化を説明しているのである。(7. p.34)この文法的範疇の階層は、大人の文法の細分化された文法的範疇が、それぞれより大きな範疇の中に内在化しており、しかもそれらが階層的につらなっていると仮定するものである。マクニールは、Pクラス、Oクラスの分化を、この文法的範疇の階層の最上段に近い所における分化を示しているものとして説明し、さらにPクラスの示す後の類的分化を説明している。(7. p.36)つまり幼児の第一言語習得過程は、この文法的範疇の階層を最上段から徐々に下降してゆく過程として捕えている。マクニールは、このような言語の文法的範疇の階層を言語普遍性とし(7. p.35)、この普遍性を発見してゆく幼児の能力をも普遍的なものとして捕えている。(5. p.11)

#### 4 基本的文法関係

文法的範疇の階層という仮説は幼児の言語発達をうまく説明できるように思われるが、少し深く考えれば不十分であることが分る。文法的範疇を定める起因となるものへの配慮がないことである。ここで基本的文法関係とその統語素性という概念が導入される。この文法関係とは文法範疇に対するものであり、文法範疇の相互関係である。マクニール自身も幼児の言語習得を説明するための中心的概念を文法範疇からこの基本的文法関係へと変えており、その理由を言語学研究の潮流の変化に求めている。(8. p.63)

マクニールは、チョムスキーの理論をよりどころにしているが、それによると、基本的文法関係とそれぞれがもつ統語素性は次のとおりである。

ORIGINATING RELATION	FEATURES
Subject	[+NP, +VP]
Object	[+NP, +V <sub>-</sub> ]
Head	[+N, +Det <sub>-</sub> ]
Predicate	[+VP, +NP <sub>-</sub> ]
Main verb	[+V, +NP <sub>-</sub> ]
Modifier	[+Det, +N <sub>-</sub> ]

(8. p.62)

ここで注意しなければならないことは、幼児が成人のことばを多少とも理解したならば、その文法関係に基づいてその統語素性が自動的に得られるということが前提となっていることである。

(8. pp.62, 63)

幼児は大人の発話の中に基本的文法関係を認識し、それをもとに発話の中の語の素性を得るのであるが、基本的文法関係の統語素性の中に〔NP〕か〔N〕が必ず入っていることに注目する必要がある。〔NP〕、〔N〕という素性はどこにでも生じ得るということであり、他の素性はその生じる環境が限定されているということである。この区別が有標(Marked)か無標(Unmarked)という概念をもってなされる。従って、二語文期の幼児が持っている素性は次のようになる。

ORIGINATING RELATION	ENTRY	STATUS
Subject		

Object Head	[+NP]	Unmarked
Predicate	[+VP, +NP]	
Main verb	[+V, +NP]	Marked
Modifier	[+Det, +N]	

( 8, p.65 )

二語文期の幼児がもっている素性といってもそれは明確なものではなく渾然とした有標性と、渾然とした無標性ともいうべきものである。もちろん有標なものがPクラスを形成し、無標のものがOクラスを形成していることになる。Pクラスの渾然とした有標性が、Entryの欄に示されているような明確な素性に分化してゆく過程が前に示したPクラスの類的分化の過程に一致するのである。

PクラスとOクラスの区別はそもそも語の相対的位置(語順)から導き出されたものであるが、文法関係を表面構造において表現するには語の屈折を用いる場合と語順を用いる場合があり、PクラスとOクラスが生じるのは語順を用いた場合となる。

結論的に、マクニールは幼児の第一言語習得過程に典型的に現われる二語文における軸クラスと開クラスの分化を、一語文期以来の文法関係が表面構造に反映されたものであり、幼児が語順を文法関係を表現する手段とする場合に生じるものと説明している。( 8, p.69 )

## 5 研究課題

生物学的な面からの研究では、たとえば、レネバーグは、人間の行動のうちで完全に生物学的に与えられた能力に基づく行動—たとえば二本足で歩くこと—と、全く文化的なもので社会の中での学習によってなされる行動—たとえば文字を書くこと—を二つの極端におき、人間の言語獲得をその中のどこに位置するかを検討し、それを生物学的に与えられた能力に基づく行動の側に非常に片よった所があると結論している。( 6, pp.70-91 )

このような生得的な能力によって言語のすべてが習得されるのではないということに注意しなければならない。言語は多面的であるということである。生得的な能力によって習得されるのは統語体系であり、音体系、意味体系などは別の過程で習得されると考えるべきである。

いずれにしろ第一言語習得過程を単純に外国語習得におきかえることは慎重を期さねばならない。最も大きな問題となるのは臨界期の存在であろう。二つの言語習得を平行的な類推で論じてはならないゆえんである。しかしその過程が異っていたとしても習得されるべき competence は同じだということを注意すべきである。competence はもはやとらえ難い渾沌とした概念ではない。それは文法範疇、文法関係、素性などの有機的集合体である。このことは、英語教育が専門であるわれわれにとってきわめて明らかな指針となるはずであり、われわれに貴重な概念を与えてくれたことになる。

## REFERENCES

1. Braine, M.D.S., 1963.
2. Brown, R., & Bellugi, U., 1966.
3. Chastain, K., 1971.
4. Dale, P.S., 1972.
5. Jakobovits, L.A., 1970.
6. Lenneberg, E.H., 1970.
7. McNeill, D., 1966.
8. McNeill, D., 1970.
9. マクニール, 佐藤, 松島, 神尾(訳)『ことばの獲得』 1972.